平成３１年２月１２日

平成 30 年度　地域貢献活動支援報告書

地域イノベーション推進機構長　殿

所　属　　教育学部
氏　名　　林　朝子

活動テーマ	**外国人児童生徒の学びの継続を目指す支援活動 ーキャリア形成につながる大学見学ツアーの実施ー（2 年目継続）**
実施期間	平成 30 年 5 月 1 日　～　平成 31 年 1 月 31 日
活動内容	（１）具体的な活動実施内容 平成 30 年 8 月 8 日（水）10：00～16：00 に津市内外国人生徒 20 名を対象とした大学見学ツアーを実施した。当日は A～G の 7 グループに分かれ、各グループに教育学部学生 1 名が支援者として入り、大学内を見学した。本年度は人文学部と生物資源学部のオープンキャンパスへの参加を中心とし、その他に、図書館やメイプルの見学、食堂での昼食も実施した。人文学部では、国際交流のブースで留学生との交流を行ったり、イタリアに関する講義（多くの写真を使用）へ参加したりと、日本から海外へのつながりを意識できるような機会を設けた。生物資源学部では、各研究室の見学が可能であったため、各グループで関心のある研究室見学を行い、普段目にしている植物や魚などがどのように研究されているのかが少しでもイメージできることを目指した。 ツアーには、学校教員 8 名（津市内中学校 5 名、津市教育委員会 3 名）の参加もあり、ツアー内容を現場教員の視点から確認いただき、ツアー実施中にも支援学生へ声掛けの工夫など具体的な指導もいただくことができた。 （２）地域への貢献（地域の発展・活性化への寄与，広がり） 大学到着時からツアー終了時まで、中学生の表情から大学という場所に入った高揚感を常に感じ取ることができた。また、実際に、ツアー中やツアー後には、生徒から「大学で勉強したい」「外国のことを知りたい」「魚の勉強をしてみたい」等といった発言があり、高校進学に留まらず、その次の段階へまで意識が向いている様子が感じられた。中学校・教育委員会の先生方からも、生徒が将来を考える貴重な機会となり、学習意欲の向上と維持につながる内容であるとのお話をいただいた。また、生徒の中には日本語運用が十分でない者もいたが、自分から支援学生へ積極的に質問することもあり、日本語使用の機会としても有意義な活動であった。 （３）共同実施者との連携状況 ツアー実施に向けての事前打ち合わせ、実施後は次年度に向けて事後検討を行った。前年度とはツアー内容が異なるため、生徒等の反応などが予測できない部分もあったが、事前に十分な連携が取れていたため、安心してツアーに臨むことができた。ツアー当日についても、支援学生への配慮をいただきながら、適切な協力を得ることができ、ツアーも滞りなく実施できた。 （４）大学の教育・研究成果のかかわり 本年度は教育学部学生 7 名が支援として参加した。学校現場において多文化共生化が進み、外国につながる児童生徒が増加している現状は把握していても、実際に

	児童生徒と接することがない学部学生が大半を占める。今回参加した学生も外国につながる生徒と交流するのが初めての者が多く、生徒と交流する中で、日本語でのやり取りの難しさに気付け、生徒のつぶやきや質問から彼らの困り感を知ることができていた。将来、教員となる学生にとっては、非常に貴重な学びの機会となった。（『三重高等教育研究』第 25 号「学生が「外国人生徒大学見学ツアー」に支援参加することの教育的意義」として掲載予定） （５）イベント等開催実績（名称，実施場所，参加人数等） 【大学見学ツアー】 日時：平成 30 年 8 月 8 日（水）10：00～16：00 集合場所：東橋内中学校・高茶屋市民センター（バス送迎） 実施場所：三重大学構内 人文学部、生物資源学部、国際交流センター、図書館、メープル館、三翠ホール、食堂 参加人数：外国人生徒 20 名（1 年生 13 名、2 年生 2 名、3 年生 5 名） 津市内中学校教員 5 名、津市教育委員会教員 3 名 三重大学教育学部学生 7 名（3 年 4 名、4 年 3 名） 大学教員 2 名（教育学部 1 名、人文学部 1 名） （６）これまでの取組みによって得られた具体的な成果について １．外国人生徒の学習意欲の向上と維持 本ツアーを通し、参加した生徒が、大学という場所に入り、大学の雰囲気や大学生の様子を初めて身近に感じることにより、将来の職業も踏まえ大学進学について考えるきっかけとなった。彼ら自身が将来の可能性を感じることにつながり、今後の学習意欲の向上と維持が期待できる。 ２．学生の多文化共生理解 グローバル化が進む学校現場では、様々な文化や言語を背景に持つ子ども達が在籍しており、将来教員となる学生には多文化共生への意識と理解が求められている。本ツアーに支援参加することで、学生自身が様々な文化や言語に接し、国際的視野を広げ、日本語についても見直す機会となった。 ３．教育現場の課題の共有 中学校教員、教育委員会教員との連携を通じ、大学教員が学校現場の様々な課題について知見を得ることができた。